



【本文監修:南九州歴史学会 画:KENRO】

明治維新150周年企画

かごしま ISHIN物語

明治維新がもたらしたさまざまな変化を分野ごとにご紹介します。

第6話 薩摩と新しい政治体制

欧米諸国が日本との交易を求めてきていた幕末。今回は、これからの日本はどうあるべきかを考え、実現に向けて奮闘した薩摩の人々のお話。

登場人物



薩長同盟や大政奉還を演出
小松 帯刀
Tatewaki Komatsu

薩摩藩家老。鳥津久光のもと、薩長同盟や大政奉還の実現に尽力し、明治初期には外交の分野で活躍しました。彼と親交のあった駐日英国公使アーネスト・サトウは、彼を「最も魅力的な日本人」と評しています。



近代日本の根幹を創った政治家
大久保 利通
Toshimichi Okubo

近代日本の根幹を創った政治家。中央集権体制の確立や殖産興業に尽力。全国の官営工場の建設や農学校の設立に携わったほか、戊辰戦争で戦場となった東北の地を開拓するため安積疎水(福島県郡山市)を築かせます。

齊彬が描いた夢を 小松・大久保が実現した明治維新

19世紀に入り、アジア各地を植民地化しつつあった欧米諸国が、いよいよ日本にも交易を求めてきました。そのため、我が国が今後どのような方向にあるべきかが全国各地で議論され、「富国強兵」という言葉が使われるようになりました。この「富国強兵」という言葉は、中国の古典『戦国策』に出てくる表現で、江戸時代後期に水戸学を中心として広く知られていました。この「富国強兵」の実現に向けていち早く取り組んだのが11代薩摩藩主・鳥津齊彬です。齊彬は、欧米諸国から進んで文物を取り入れ、藩内に日本初の近代的工場群「集成館」を築きました。そして、自らの考えを伝えるために、幕府や諸藩の視察を受け

入れたと考えられています。また、有能な人材が集い一丸となって国政を運営すべきと考えた齊彬は、新しい政治体制を築くため、幕府の老中たちと連携を進める中、幕府側からの求めに応じて養女・篤姫を13代将軍徳川家定に嫁がせました。しかし、齊彬は志半ばで急死。折しも日米修好通商条約や将軍後継者を巡る幕府の政治動乱の最中であり、齊彬と親交のあった人材が国政から離れることになりました。齊彬の死後、藩を牽引することになった鳥津久光は、小松帯刀など若く有能な人材を登用して、齊彬の描いた我が国の政治のあり方を目指し、邁進します。彼らは朝廷の協力を得て、幕府の政治改革を推し進めるとともに、

齊彬と親交のあった人材を国政に復帰させるなどして、有能な人材が集って議論できる形に整えていきました。しかし、薩摩藩が幕府や朝廷を影で操ろうとしていたと考える人々が現れたり、将軍後見職となった一橋慶喜が自らの意見と近い人々だけで国政を進めようとする動きを見せたりするようになります。そこで、有能な人材が集って国政に当たるといって体制を幕府に委ねることは極めて困難だと考えた小松は長州藩と手を組み、幕府と距離を置くようになり、ます。そして、15代将軍・慶喜を説得の末、大政奉還を実現させ、朝廷が新しい政治体制の中核を担うことになりました。大政奉還直後、小松は病のため政務から離れてしま

います。そして朝廷を中心に、全国各地の人材が集って近代国家の運営が行われることになりましたが、そのシステムを築いた人物のひとりが大久保利通です。大久保は、版籍奉還から廃藩置県を経て、中央集権体制を建設。内務省を設置し、「富国強兵」を掲げて殖産興業を全国的に推し進めました。齊彬が描いた夢を小松が演出し、大久保たちが現実のものにする。明治維新とは、わずか30年にも満たない激動の中で、夢を実現するために奮闘した時代だったと言えるでしょう。約150年前に活躍した薩摩の人々が努力して築いた新しい日本が、現代の私たちの暮らしの原点となっています。きつと私たちの努力の先に、次の時代の豊かな暮らしが続いているのでしょうか。

維新 道 具

日常に西洋文化を受け入れていた大久保

幕末・維新は本格的に西洋文化を生活の中に受け入れようとする時代でした。大久保利通の遺品の中には、洋風の洗面器などが残っています。食事もパンやブランデーなどを取り入れていました。



重要文化財 大久保利通使用洗面道具(黎明館蔵)